

芝居の音楽あれこれ

毛利蔵人

私は、映画、演劇、テレビ、ラジオ等の音楽を手がける機会が少くない。今年、まず最初に、三月の銀座セゾン劇場・松竹提携公演、「リチャード三世」の音楽を担当した。「リチャード三世」は、シェイクスピアの歴史劇の中でも「ヘンリー六世」三部作とならんで、イギリス王政史に名高い「薔薇戦争」に因む王位継承の争いをめぐる希代の悪人を主人公とした大作である。緒形拳が初めてシェイクスピアに挑むという点でも話題を呼んだが、私は演出のジャイルス・プロックとは三度目の仕事でもあり、またセゾン劇場はいわば「勝手知ったる」小屋であり、さらに幾人かの出演者・スタッフとも旧知の間柄で、気楽な仕事と思っていた。事実、昨年の秋に

ジャイルスと最初の音楽打合せをしたときには、彼が音楽プランのメモを用意しており、それに基づいて話し合ったが、どちらかといえば伝統的・保守的な音楽ではなく、擬古的なスタイルの現代音楽語法で、という基本的な考え方は、私のそれと一致したので、うまく行くだらうと思った。

ジャイルスと最初に仕事をしたのは、麻実れい主演の「桜の園」(九一年)で、二回目は松本幸四郎主演の「リア王」(九三年)だった。彼の演出は、基本的にはリアリズムに基づき、イギリス演劇の伝統に深く根ざしたものであることはいうまでもない。二度の仕事を通して、そのような彼の考え方をある程度理解しているつもりだったので、今回も大

丈夫だらうと思っていた。が、稽古が始まって三週間近く経っても演出プランの全容が一向に見えて来なかった。それは、私だけでなく、俳優さんたちや他のスタッフも同様であるらしく、舞台監督や演出助手とあれこれ話し合っても埒のあかない点が多く、どのような音楽プランを立てたものか困ってしまっただ。もちろんジャイルスとも直接話してはみたのだが、彼の考えも日々変化する。一度決めた方針を減多なことでは変えない彼にしては、珍しいことだった。あれこれ迷っていることが傍目にも見てとれた。そうこうするうちに、だんだん時間もなくなってきた。取り敢えずシンセサイザーを使って仮録音した音楽テープを本録予定日の二日前に渡し、

聞いてもらつたところが、その半分以上が彼の気に入らなかつた。激しい議論になつた。

ふだんの会話はともかく、激昂した言い争いになると、語彙と話すスピードに差があり過ぎて、どうしてもこちらが押され気味になつてしまふ。イギリス人とシェイクスピアについて英語で議論をしたらかなわない位のことには百も承知だが、こちらにも作曲家としての意地があり、そう簡単には譲れない（譲りたくない）部分があつたものの、結局のところ最終的には各セクションへの指示をまとめるのが演出家である以上、譲歩せざるを得ず、何度か書き直しをさせられた。結果的には、比較的保守的なスタイルの音楽が多くなつてしまひ、私としては必ずしも本意ではなかつた。それはともかく、上演が成功したか否かは、観客の判断に委ねる他はないが、私にとつて納得の行く仕事ができただうか、ということになる、多くの問題を残したといえる。

その意味では、七月の紀伊國屋ホールに於ける、地人会・紀伊國屋書店提携公演の「はつ恋一抱月と須磨子」（斎藤憐作・木村光一演出）は、うまく行つた。木村さんとは、かれこれ十数年の付き合いになる。それこそ

シェイクスピアから山田太一まで、一緒に仕事をした作品はかなりの数になる。今回は斎藤憐さんの書き下ろしの脚本で、明治の末から大正にかけての、日本の第一次新劇運動に大きく貢献した島村抱月（山本圭）と松井須磨子（三田和代）の演劇革新にかける情熱と世間のしがらみを超越した恋愛関係がおおらかに描かれている。抱月の家に書生として住み込んで、東京音楽学校に通つていた作曲家、中山晋平（森山潤久）ももちろん登場する。

劇中の晋平は大正琴やオルガンをひくののだが、森山さんは、何も楽器はひけないし五線譜も読めないという。そこで、とにかく大正琴は習いに行つてもらつた。その成果は上々で、何とか芝居をしながらでもひけるようになってくれた。音楽処理の上で最も重要なことのひとつとして、信州（現中野市）の出身である晋平が、自分の体にしみこんでいる民謡の音階からヒントを得て、抱月の「芸術座」での「復活」の劇中歌として大ヒットした「カチューシャの唄」を作曲する過程を示すといふことがあつた。その具体的な方法として、

まず晋平が、ド・レ・ファ・ソ・ラの五音階で「信州民謡」を大正琴をひきながら歌う。それを聴いた抱月が、「復活」の劇中に小唄

を入れることを思いつく場面で前半の幕が下りるのだが、私は、後半で須磨子が「カチューシャの唄」を歌うときのキーを、前もって三田さんと相談して「へ長調」に決めてあつたので、ド・レ・ファ・ソ・ラの五音階で、実在しない「信州民謡」を作曲し、それが自然に「カチューシャの唄」に変わつて行くように細工した。その他にも、晋平が作曲したメロディーと、私が作曲した「晋平風」メロディーとを混ぜた音楽を随所にちりばめ、シンタや、演歌師のヴァイオリンなども作曲・引用した。木村さんは、音楽に対する鋭い感覚と明確なイメージを持ってゐる演出家で、作曲家への注文も常にはつきりしており、私（たち）にとつては仕事やり易い。

この後、木村さんとは水上勉さんの一人芝居「藩陽の月」（松山政路）が続く。そして、それが終わるとすぐにセゾン劇場での「四谷怪談」（平幹二郎主演・演出）が待っている。今年の夏は殆ど休めそうにない。